

2019年度 第3回 上野村観察会 記録

日 時	2019年6月25日（火）～6月27日（木）	天候：晴
観察地	群馬県多野郡上野村・富岡市	
講 師	田中克先生（京都大学名誉教授・当講座コーディネーター）	
テー マ	上野村伝統回帰の暮らし	
備 考	参加者 21名（田中先生・スタッフ2名含む）	記録 叶 昭子

1. 第一日目（6月25日）

【上野村自然観察会のねらい 田中克先生】

上越新幹線高崎駅から上野村まで上新観光バスで約2時間30分。車中、田中先生から上野村観察会のねらいを説明していただいた。

「内山先生は東京と上野村に生活拠点を持ち、数年まえから“伝統回帰”的大切さを説かれています。これは単に昔の生活様式に戻れということではなく、元々地域資源で生きてきた上野村なので、豊かな森林資源や自然環境を生かし、進歩した有効なテクノロジーもうまく活用しながら、歴史を通じて試され済みの伝統に回帰することで、持続可能な社会を生み出せると説かれています。

今回訪問する上野村は、多くの所で失いつつある日本の原風景が色濃く残されている村との思いから企画しました。本来ならば、内山先生の講演が先にあればよかったのですが、大変お忙しい方なので順序が逆になりました。今日から三日間の体験は、内山先生のお話の理解に役立つことと思います。」



内山 節先生

（1）川和自然公園（まほーばの森、スカイブリッジ、不二洞）散策

夕刻までの約2時間を宿舎不二之家からほど近い、川和自然公園を散策。上野村が観光施設として平成10年に建設したまほーばの森、スカイブリッジはシーズンオフなので、他の観光客には出会わなかつたが、5月ゴールデンウィークや夏休みには東京方面からの観光客でにぎわうこと。まほーばの森はロッジやキャンプ施設が揃い、



小・中学校の野外学習施設としてよく利用されているとのこと。スカイブリッジは峡谷に架けられた高さ90m、全長225mの吊り橋で、数か所にシャボン玉発生装置があり、遠隔操作でシャボン玉が次々に飛び出し峡谷に消えていく仕組みと光景を面白く思った。（写真：上野村HPから） 不二洞は関東地方第一の規模で、未発掘部分も多くあるという。見学に約1時間要したが全員無事に完歩。

（2）西澤 晃先生の講話

不二野家で、夕食前に上野村の歴史、文化、現況について説明いただいた。

- 1) 自己紹介：私は上野村の隣の神流町に住んでいます。昭和30年代の中頃から、11年間上野村の小学校・中学校に勤めました。中学校の時、不二野家の主人・昭司君の担任でした。昭和50年代には上野村の教育委員会に数年間勤務し、約10年前から神流町の教育長をしておりました。現在は、上野村でボランティアとして活動しています。
- 2) 上州のからつ風とかかあ殿下
からつ風は前橋あたりはすごいのですが、上野村は吹きません。

上州かかあ殿下とは、養蚕が盛んなこの地では、養蚕は女性を中心としてよく働く、そのことを意味しています。群馬の女性はおもてなしが好きな人が多く、男性もそうですが、人情深い、優しい、親切、世話やきの人が多くいます。白井集落に行かれるとの事ですが、そこでもおもてなしをしながらの話が聞けるのではないかと思っております。



西澤 晃先生

3) 上野村の歴史概観

- ① 縄文時代：縄文土器のかけらが上野村で発見されています。小学校の前では、群馬大学が調査した結果、住居跡も出土してています。神流川の河岸段丘に住んでいました。
- ② 弥生時代から平安時代
この時代を裏付ける出土物はありません。
- ③ 鎌倉時代や室町時代
寺院、石仏などに、地名や名前が見られ、記録として残されています。
- ④ 戦国時代
山中衆という、武士ではない土耕集団の上野村の安積播磨上重寅という人物を中心に、峠を越え北条氏と戦った記録があります。その頃の山城や砦がいくつか残っています。
- ⑤ 江戸時代
幕府の直轄山中領となります。上野村を上山郷、中山郷、下山郷3つの郷に分け、それぞれの所に割元役（注）を置きました。上山郷は黒澤家がその役を担いました。上野村は乙母、川和、勝山、新羽、野栗沢、乙夫、檜原の7つに分かれていました。
明治22年になると町村制が出来、7つの村が合わさり上山郷から上野村になりました。その後130年経ちましたが、合併、分村、統合をせず130年間村の面積は同じです。

（記録者注：割元約とは江戸時代の地方行政組織で、その身分は士分に準じており、代官・郡代と庄屋の中間の立場）

4) 人口

江戸時代18世紀中頃=2600人、明治22年=2300人、現在約1100人で、江戸時代の半数以下です。住民はIターンの人が多く、250人（全人口の約23%）います。昭和の終わりに移住し30数年になる人もいれば、若い子育て中のカップルもいます。

5) Iターン者の仕事

村役場の正規職員、第3セクターの上野振興公社、宿泊施設“ヴィラせせらぎ”、“やまびこ荘”、日帰り温泉施設シオジの湯、木工製品の創作などで生計をたてています。

6) 米無し天領のこと

米を生産できないにも関わらず、江戸幕府はこの村を直轄領にしました。理由の1つは、豊富な森林資源の確保、もう1ひとつは十石街道の取り締りです。

7) 神流川

埼玉、長野、群馬3県境にある三国山に源を発し、上野村の源流は平成の名水百選に選ばれ、「関東一きれいな川」に認定されています。神流川あってこそその上野村です。



神流川

8) 「おてんま」、「えいこ」

「おてんま」とは勤労奉仕のこと。お金は貰わないでみんなで橋を直すとか、道を作る等、公共の仕

事を無償で行う。現在もおてんまの会があります。

「えいこ」は、労力交換すること。例えば屋根替えは多くの人手が必要ですが、お互いに無償で労力を提供し合う仕組みです。草刈りや、麦刈りなど一日働いてもらったので、一日働いてお返しすること。昔からこのような相互扶助をしてきました。

9) 作物

米の栽培ができないので、オオムギ・コムギ、雑穀と言われるヒエ・アワ・キビ・ソバ・モロコシなどを自給自足で作っていました。オオムギは押し麦ではなく、石臼で挽き割りして食べていました。米は信州から購入、白井宿に入ります。百姓の家で白い米が食べられるのは正月などに限られていました。

10) 民俗行事

上野村乙父集落に伝わる「おひながゆ」は、由来はよく分かっていないが、子供達によって受け継がれて来た民俗行事で、国の無形民俗文化財に指定されています。獅子舞、神楽もあります。

11) 暮らし

暮らすには大変な所で、60年前上野村は群馬の秘境といわれていました。昭和30年代初期まで家の中にトイレ、風呂はなく、屋根は木の板でした。水道が敷かれるまでは、井戸を掘り、あるいは節を抜いた竹を繋いだ導水管で水を引いたり、沢から水を担いで来たりしました。風呂はもらい湯をすることもしばしばありました。

農民が道路工事などに出て現金収入が入るようになり、昭和40年代終わり頃から生活が変わってきました。燃料が木材から石油になり、プロパンガスになり、電気や公共水道ができました。今は蛇口をひねれば水が出る便利な生活になりました。

12) 農林業

和紙は山中和紙として現金収入になりました。こんにゃくを傾斜のある山地で作ったこともあります。が長くは続きませんでした。

稻作は明治の終わり頃から昭和30年頃まで行われていましたが、水が冷めたく気温が低いので米作適地でなく、現在は行われていません。イノブタの飼育、椎茸栽培は村営事業で行っています。

13) 教育

高校は今の神流町に万場高校があり、スクールバスで当校、進学率は高かった。現在は富岡市の高校に通学する生徒のために村営バスで送迎しています。

14) 人とのつながり

大きく変わったのが、葬式と結婚式です。葬式は土葬が火葬になり、自宅から斎場になり、業者が取り仕切るようになり、昔のように村人にお世話になることがなくなりました。結婚式は昔は仲人を立て、式場は自宅や公民館でやっていましたが、現在は高崎や東京で式を挙げる家もあります。親戚、地域が中心だった時代から、職場や友達中心になってきました。

15) 栄光ある上野村の建設

10期40年村長を務めた黒澤丈夫村長(右写真)は、就任2期目の後半に、栄光ある上野村の建設をめざし、①知識水準の高い村、②道徳水準の高い村、③健康水準の高い村、④経済的に豊かな村の4本の柱を掲げ、その実現に尽力しました。

現在の上野村の基盤を創り、全国の町村長会長も務めた優れたリーダーでした。

村役場の前に銅像と栄光ある上野村の碑文があります。 黒澤丈夫村長像(部分)



16) 村の財政

人口の割に村の予算は非常に多く、東京電力上野ダム発電所の固定資産税収入が約2.5億円あり、豊

かな財政といえます。

17) 獣害

イノシシ・シカ、山ウサギによる食害がひどく、畑に囲いがないと作物が食べられてしまう状況です。

キツネが少なくなり、山ウサギが増えた。サワガニやヘビもイノシシが食べてしまい少なくなった。

山野草は少なくなり、昔は見なかった植物がみられるようになりました。

(3) 不二野家の夕食は主人自慢のまたぎ（ジビエ）料理

不二野家主人、黒澤昭司さんは猟師でもあり、夕食に伝統のまたぎ猟によるクマとイノブタ、土作りにこだわった自家製のとれたて野菜が食卓に並びました。クマとイノブタは初体験の人が多く、美味しいと言う声が多く聞こえてきました。宿主人の上野村音頭の披露もあり、お酒も進んでぎやかに夜が更けていきました。



左：黒澤昭司さん

右：マタギ料理

左イノブタ 右クマの肉

2. 第2日目（6月26日）

(1) 御巣鷹山慰靈登山（地理上の正式な地名は“高天原”）

御巣鷹山登山口までバスで1時間。以前の登山口で小休止、駐車場は現場に近いところに設けられ、道路も整備されていた。

登山口前で準備体操をして、水分補給し出発。入口横に杖やストックが置いてあり自由に使用できた。昇魂の碑まで800m、高低差180mをゆっくりと登った。

登りながらかなりの汗をかいだ。途中、スゲの沢で水分補給や手を洗い再出発。登山道は慰靈碑まで1本道で、以前に比べて道はかなり整備されていた。

登り始めて約40分、全員招魂の碑に到着、招魂の碑に線香を焚き、手を合わせて御靈の安寧を祈った。山頂近く焼け焦げた木から幼樹が伸びてきているのを見て、生命の強さを改めて感じた。

下山途中で日本航空の新入社員（研修生）および安全推進グループの2団体に出会った。事故の再発を防ぐため全社員がこの悲惨な事故をしっかりと認識し、思いを受け継いでいく研修登山のことであった。

(2) 慰靈の園

上野村の慰靈の園は、日航機墜落事故の犠牲者520人を追悼する施設。上野村の人々が3千坪の土地を提供し、建設されたとのこと。花を捧げ、黙とうして犠牲者の御靈に祈った。併設資料館には、事故直後上野村の人達が救助に向かった時の様子をビデオで見た。一瞬にして命を奪った事故のすさまじさ、



花を捧げる田中先生



全員黙祷

生存者を発見した時の喜び、遺族の悲しみなどが映像で鮮烈によみがえる。展示の子供用の小さな靴、墜落時刻で止まったままの腕時計、機内で書かれた遺書、どれも涙を禁じえ鳴ったばかりであった。じ得なかつた。

(3) 国指定重要文化財 旧黒澤家住宅（案内 西澤先生）

黒澤家は代々上山郷の大総代（注）を務めた旧家で、将軍家に献上する鷹の保護区の管理も担当した。建物は19世紀中ごろの建築で、切妻作り栗板葺き石置屋根の建造物で、間口21.9m、奥行16m。用途により使い分ける玄関が3つあるほか、座敷が4室、居室などが8室もある大邸宅。昭和45年国的重要文化財に指定された。

- 1) 3つの玄関の用途：式台＝代官用、村玄関＝村の諸行事用、大戸口＝家族・使用人用
 - 2) 四つの座敷は幕府の代官が黒澤家を訪れた時使用する。「上段の間」「中段の間」「中の間」「休息の間」があり上段と中段の仕切りの欄間は両面絵柄の違う意匠が施されている。
 - 3) いおりのある「茶の間」は31畳もあり、主人が座る後部は巨大な神棚がある。
 - 4) 二階は仕切りのない板の間で、養蚕に使用していた。現在は械織り、紙漉き、農機具など、上野村の生活や産業を支えて来た道具類を展示している。
- 2) 屋根を栗板で葺く理由と置石の置き方
- 上野村は稻がないので水に強い栗板を使用。板が強風で飛ばされないように石を置いている。この家は栗板1100束、石3400個を使用。石の置き方もアリが巣を作らないよう工夫している。
- （下写真は上野村ホームページより）



（記録者注）大総代は大庄屋ともいう。江戸時代、地方行政を担当した村役人のひとつ。代官または郡奉行の下で数村から数十村の庄屋を支配して、法規の伝達、年貢割り当て、訴訟の調停などを行った。

(4) 旧十石街道白井集落の人々との交流

白井集落集会所で土地の古老にお会いし、おもてなし料理をいただいた。
「今日、皆さんお見えになるのに何を持ち寄るか相談せずに来たが、聞いてみるとイモばかりだった。」笑いが起きた。明るい笑顔で語って下さった。
和んだ雰囲気が大変良かった。

ここではコメは取れないので、主食はじやがいものこと。赤芋を甘辛く煮たもの、コロッケ、フキ、こんにゃく、レタスブロッコリー、クルミのゆべしなど、すべてここに集まった主婦の家で栽培し、手作りの素朴な郷土料理であったが、どれもおいしくいただいた。

白井集落の皆さんと特別な話はしなかったが、見ず知らずの外来者をこのようにもてなす理由を尋ねると、皆さん全員息子や嫁が家の切り盛りをしているので、隠居仕事に白井集落を訪れる人との交流を楽しみにしているとのことであった。四国のお遍路さんのお接待の文化は、四国だけのものではなく、上野村にもあることを興味深く思った。



おもてなしのごちそう

(5) 十石街道と白井宿（案内 西澤先生）

白井関所跡付近の街道を散策しながら、説明していただいた。

1)

う名の由来は、信州から一日十石（1500 kg）の佐久米を馬で白井宿に運んだことに因む。

2)

物を扱う家が7軒あり、旅館も数軒あり、両替屋、質屋、食堂など全部で60軒ほどもある大きな宿場町であった。

3) 藤岡と上野村を結ぶ道がつくられると人や物の流れが変わり、十石街道の往来は非常に少なくなり、現在は殆ど利用されていないようである。

十石街道（白井集落）

4) 11月に、昔に倣い十石市をひらいている。上野村、産業情報センターも深く関わって支援するイベントであるが、長野県佐久穂町との交流で佐久穂町の田んぼで米を作り、収穫米を昔のように人力で十石峠を越えて白井集落に運び、ご飯を焚き皆でいただくことをこの十日市でイベントとして実施し始めた。十石峠、十石街道が現代によみがえることを願っている。

5) 秩父事件

明治17年10月31日から11月9日にかけ秩父事件が起こった。埼玉県秩父郡の農民が政府に対して負債の延納、雑税の減少などを求め、自由民権運動の影響下に発生した武装蜂起事件で、群馬県・長野県の村々にも波及し、数千人規模の一大騒動となった。政府軍、警察により鎮圧されるも、菊池寛平は150人ほどを引き連れ、白井集落で宿営した経緯がある。事件は長い間秩父暴動として悪事、犯罪とされてきたが、事件から100年を経て、自由民権運動として農民らが立ち上がった正当な行為として見直され、「秩父事件」として正しく評価、顕彰されるようになった。



(6) 浜平温泉シオジの湯

白井集落の訪問が終わり、浜平温泉しおじの湯で一日の疲れをいやした。風呂から上り、神流川の清流を眺めながらカジカの声とせせらぎの音を聞いた。自然が醸す音はなぜこんなにもやさしく、こころをいやすのだろうか。

(7) 今井家旅館に宿泊

上野村役場近くの乙母地区にある今井家旅館に宿泊した。主屋は築400年。

今井家は、木曾義仲の家臣、今井四郎兼平がこの地に落ち延び定住したのが始まりで、飾られた古い甲冑が今井家の歴史を物語り、名主も務めた旧家のこと。

旅館開業は明治中期で、「秩父事件」にも巻き込まれ、仏壇横の柱に大きな刀の跡が残されている。1985年（昭和60年）日航機123便墜落事故の時には報道機関の宿泊施設となりご主人、女将さんなどは大変な苦労であったと話された。

宿泊した著名人の揮ごうを額装して応接間に飾ってある。その数は半端ではなく壯觀であった。額を見ながら女将のお話を聞くのも、この旅館の面白さと思われた。



第3日目（6月27日）

(1) 恐竜センター（群馬県多野郡神流町、学芸員の案内で見学）

1) 昭和60年、神流町中里地区で日本で初めて恐竜の足跡を発見した。この足跡は約1億3000万年前の白亜紀、岩に



水の流れた跡が残された「さざ波岩」が露出し、そこに不思議なくぼみがあることから調査の結果、恐竜の足跡であることがわかった。これを機に村おこしのため昭和62年恐竜センターを設立した。センターは平成30年にリニューアル、別館を増設してゴビ砂漠出土の化石を展示している。

- 2) 現在ティラノサウルスの産状骨格や化石など200点を展示。世界有数の恐竜化石の宝庫、モンゴルと交流、ンゴル出土恐竜化石の展示も行っている。
- 3) 山中地溝帯という地層で恐竜の背骨一部の化石を発見、山中で発見したのでサンチュウリュウと名付けた。そのほかにも、二枚貝、巻貝の化石が発見され、このあたり一帯、以前は海であったことがわかる。

神流町は群馬県の南西部、神流川が流れる山の中の人口約1700人の町である。恐竜センターは町の規模に似合わず立派な博物館。展示内容も豊富で恐竜ファンならずとも多くの時間を割いて鑑賞したかったが、予定上1時間で切り上げざるを得ないのが残念であった。

(2) 世界文化遺産 富岡製糸場（ガイドの案内で見学）

1) 工場の概要

- ① 明治政府は輸出を国策の1つとして製糸産業の育成を図ることを決めた。近代化のモデルを示すため、官営の機械製糸工場を建設する計画がスタート、西洋の技術を取り入れるためにフランス人技師ポール・ブリュナを招聘した。
- ② 工場敷地に選ばれたのが、群馬県富岡市で、広大な土地があり、養蚕が盛んで、良質繭が確保できる。水が豊富であることなど、製糸工場に必要な条件を満たしていた。
- ③ 建設工事は、ポール・ブリュナの計画書をもとに明治4年から始まり、翌明治5年7月に完成し、10月に操業開始。
- ④ 建築物は瓦葺き、木骨、レンガ造りで日本とフランスの建築の粹を集めた。木製器械しかなかつた時代に、140mある繰糸所（繭から生糸を作る場所）に金車と呼ばれた鉄製の機械が並び、一斉に動く姿は壮観だったとのこと。

2) 富岡製糸場で働く人々

北海道から九州まで、全国各地から400人の工女を募集。彼女らは、旧藩主などの格式高い家柄や著名人の娘が多く、「近代日本の発展」を目指しフランス人教師から熱心に学んだ。併設の学校で終業後勉強できた。付属病院もあり無料で受診できたという。技術を習得した工女は「富岡乙女」と呼ばれ、出身地に戻り器械製糸の指導者として活躍した。

3) 長い歴史の幕を閉じる。そして世界遺産へ

富岡製糸場で生産された生糸は世界中から最高級品と認められた。しかし生糸価格の低迷、化学繊維の普及、など日本の製糸業は衰退していった。工場閉鎖後も大切に保管し、平成17年に所有者片倉工業（株）から富岡製糸場の建築物を富岡市に寄付。平成26年6月に世界遺産に登録された。



明治新政府が日本を近代国家にすべくヨーロッパの先進技術を取り入れて建設した富岡製糸場は、見るべきものが多くあると思うが、見学時間が1時間と短く、その一部を駆け足で見学せざるを得なかった。短時間の見学であったが、ガイドの説明からも明治新政府の意気込みを感じることはできた。希望を言えば、多くの建造物があるが内部が見学できるのは当日1施設のみで、他は外から説明を聞くだけであった。他の設備が公開されると、社会の関心が一層高まるのではないかと思った。

富岡製糸場を見学後、近くの「いちの家」で、昼食に群馬名物“おきりこみうどん”を食べ、高崎駅から上越新幹線で帰阪の途についた。

〈記録者所感〉

上野村の自然観察会三日間でいろんなことを考えさせられました。

田中克先生から往路のバス車中で「上野村の伝統回帰の暮らし」を観察会に取りあげた理由をご説明いただきました。一方、内山先生は著書「いのちの場所」に次のことを書かれています。

- ① 上野村は生者だけのものではなく、自然と生者と死者が暮らす場所なのである。日本の伝統的社會では、社会の構成メンバーのなかに自然が入っていた。他と換えることのできない自然が村にはあり、他の死者たちと換えることのできない祖靈に包まれて(村人は)暮らしてきた。
- ② 故黒沢丈夫村長が村人に繰り返し訴えた言葉
 - ・(高度成長期の日本について) 現在の日本の動きに惑わされるな
 - ・この自然を守つていけば必ず日本のトップランナーになれる
 - ・上野村の人間は昔から上野村一家として暮らしてきた。この共同体を守り抜こう。

「伝統回帰の暮らし」とは内山先生がおっしゃるように、特別な暮らしを指すのではなく、上野村の人びとが昔から大切にしてきた精神を現代に活かした上野村を創生することではないか。そのように考え、三日間の計画を消化しながら「上野村とはなにか」を考えてきました。まだその結論を得るに至っていませんが、少なくともいえることは、今回の伝統回帰の旅は、こころのふるさとに里帰りしているような気がしました。出会ったみなさんは、初対面とは思えない暖かな気持ちにあふれていました。心から感謝しております。

五輪の聖火リレーで上野村を走る様子を見るのを楽しみにしています。